



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

母からの負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の作成：因子妥当性と信頼性の検証

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大河原,美以, 猪飼,さやか, 福泉,敦子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/132591

母からの負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の作成

—— 因子妥当性と信頼性の検証 ——

大河原 美以*・猪飼 さやか**・福泉 敦子***

教育心理学分野

(2012年9月10日受理)

1. 本論の目的

筆者は、これまでの臨床経験^{3) 4) 5) 6) 7)}を通して、子どものさまざまな心理的問題の根底には、「感情制御の発達不全」があることを指摘し、その症状形成の仮説モデルを提示してきた^{8) 9)}。またさらにそれは治療援助モデルとしても機能する仮説であることを、脳科学の観点から論じてきた¹⁰⁾。

「感情制御の発達不全」とは、身体の中から当たり前にわいてくるネガティブな感情（不安、怒り、悲しみ、恐怖など）をそのまま安全に抱えることができない状態をさしている。それには、ささいなことでできて、怒りの感情が暴走してしまう場合、不安を感じると身体が固まり登校できなくなってしまう場合、感じていたくないネガティブ感情をないことにするために行われる自傷行為なども含まれる。それは、外側の方向に攻撃的になる場合、内側の方向にこもる場合、その両方を包括している概念である。

本論の目的は、臨床実践と理論的妥当性に基づいて構成された「感情制御の発達不全」の症状形成の仮説モデルを心理学的に実証するための準備として、母からの負情動・身体感覚否定経験認識質問紙を作成し、その因子妥当性と信頼性の確認をすることである。

2. 「感情制御の発達不全」に関する先行研究

図1が大河原^{8) 9) 10)}に示した「感情制御の発達不全」の症状形成の仮説モデルである。以下、図1を解説する。

乳幼児期における「Ⅰ：親子のコミュニケーション不全」が子の「Ⅱネガティブ感情における脆弱性」を引き起こし、子は環境に適応するために解離反応で感情制御を行い、反動として、過覚醒状態による感情制御困難状態が生じる。過覚醒状態による感情制御困難は、大人の叱責による制御を受けることにより、悪循環となり、解離が進行する。解離反応による感情制御状態は、いわゆる過剰適応（解離様式による適応）を示し、褒められることでその反応は強化されるが、外的なトラウマティックストレスに対処できなくなると、過覚醒反応による感情制御困難状態に陥ることになる。児童期においてこのような悪循環を繰り返すことにより、「Ⅲ：感情制御不全状態」が定着していき、青年期の深刻な問題へと進行していくと考えられる。ここで「解離」と記載している状態は、乳幼児期・児童期においてはおおむね「一次解離」を意味しており、疾患名としての解離性障害を意味するものではない。

大河原¹¹⁾では、さらに「Ⅰ：親子のコミュニケーション不全」を引き起こす乳児期の愛着システム不全が、母子双方の感情制御の脳機能との間における情報のやりとりとして記述可能であることを示した（図2）。

以下、図2を解説する。母子の愛着システム不全が起こるときには、子から発せられる生体防御反応の表出（泣く）によって、母の内臓感覚に不快が生じ、母自身の負情動が喚起されている状態にある。そのため、子のSOSの訴えに対して適切な情動調律が行な

* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

** 東京学芸大学大学院教育学研究科

*** 足立区子ども家庭支援センター (120-0004 足立区東綾瀬 1-5-17)

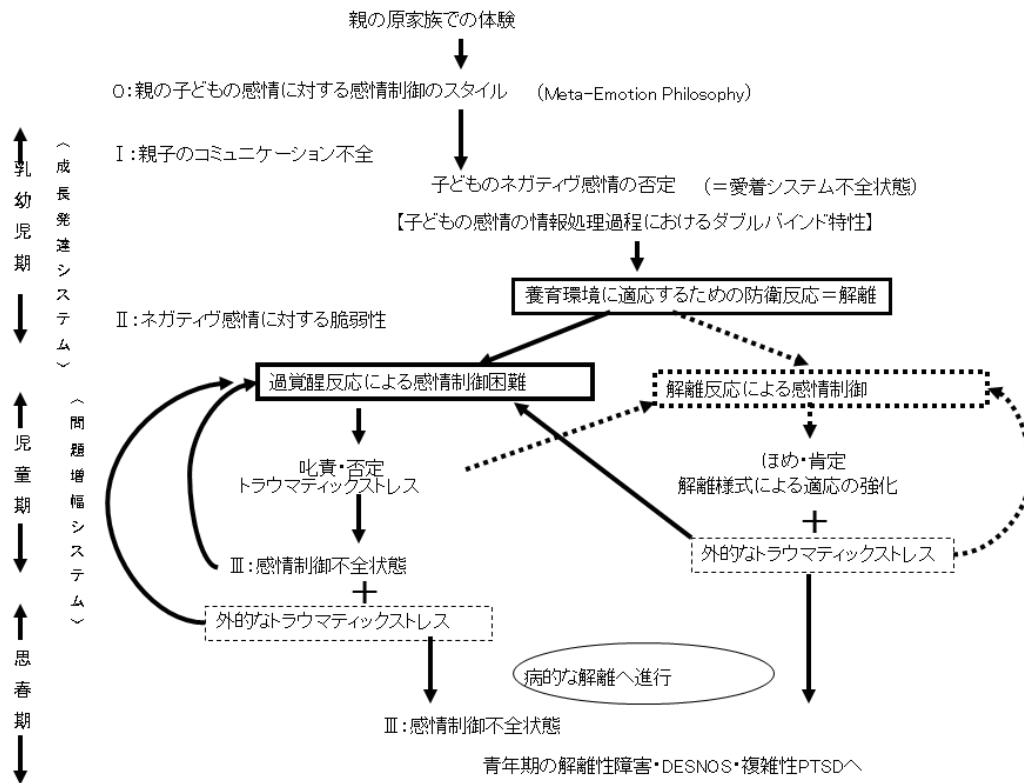


図1 感情制御の発達不全の症状形成の仮説モデル (大河原^{8) 9) 10)}

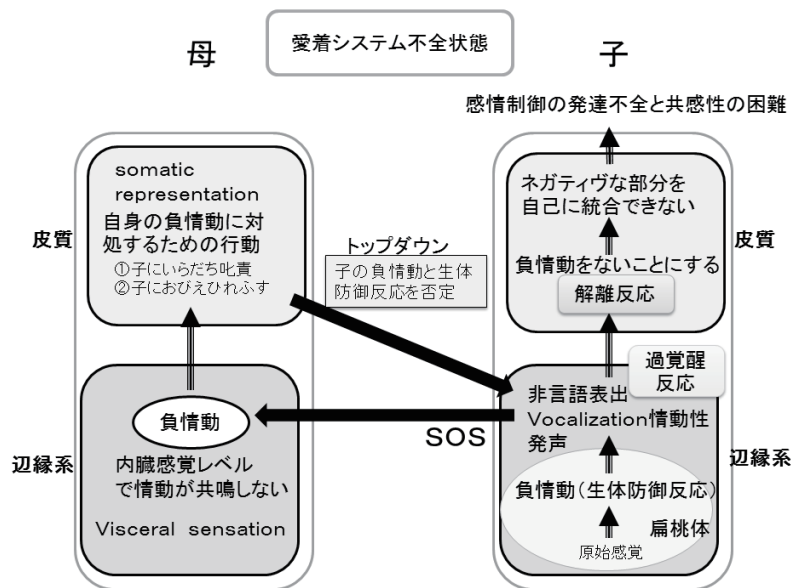


図2 愛着システム不全の母子相互作用に関する仮説モデル (大河原¹¹⁾)

われない。そのため、母には自身の辺縁系を支配している負情動を制御するための行動をとる必然が生まれることになる。臨床経験からは、そこで異なる2つの行動パターンが選択されると考えられる。1つには、子の泣き声にいらだち、子に叱責を与えるパターン。もう1つには、子の泣き声におびえ、泣きやませるために子にひれふしてしまうパターンである¹²⁾。いずれ

にしても、それらの関わりは、生体防御反応としての子の負情動表出を否定することになるという点で共通している。そのような不適切な関わりは、子の過覚醒反応をエスカレートさせ、解離反応に転じることで適応するという防御反応を導くことになる。それにより、ないことにされた子の負情動は自己に統合されることが困難になり、感情制御の発達不全状態を示すこ

とになると考えられるのである。

以上が、筆者のこれまでの研究^{8) 9) 10) 11)}から導き出されている仮説の要約である。

3. 質問紙の項目の作成

この仮説を心理学的に検証するためには、母によって負情動と生体防御反応を否定されるというコミュニケーションの中で育った人が、青年になったときに、解離傾向やネガティブ感情を制御できない傾向を有するのかどうかということを調べる必要がある。本論では、そのような実証研究を行うための準備として、母からの負情動・身体感覚否定経験を測定する質問紙の作成を行う。

筆者の仮説では、児童期における悪循環の様相(図1)が問題を深刻化させる問題増幅要因であると考えており、乳幼児期における母子のコミュニケーション不全が、直線的に青年期の問題のすべてを規定するとは考えていない。またさまざまな状況の悪循環の背景には、父をはじめとした家族の関わりが複合的に作用しており、母子システムは一部のサブシステムとして位置づけられる関係性である。負情動に対する対処方略としての解離様式の獲得は、個の脆弱性の基盤として、その後の適応状態と深く関係していると想定しているが、当然そのプロセスにおいても、母子関係をささえる父との関係性など含めて複合的な相互作用が生じているのが、現実であろう。

本研究における仮説は、もともとそのような複雑な事象を扱う臨床実践の中から抽出されてきた仮説である。この仮説を心理学における実証研究のモデルにのせるためには、その複雑性を単純化するプロセスが求められる。そこで、質問紙作成にあたっては、母からの負情動と身体感覚(生体防御反応)の否定経験の認識に絞って測定するものとした。

また、親子関係は、長期に渡る日常的な関係性であるため、実際に「否定される事実」があったかどうかという正確な記憶を回顧的に尋ねることがその客観性を担保するという保障はない。そこで、青年が現在親に対してもっている認識を尋ねることで、そこに反映されている関係性をその指標とすることとした。

以上をふまえて、質問紙の項目は、表1に示したとおり、決定した。

負情動を否定された場面として「怒る」「泣く」「ぐずぐず」「イライラ」「不安を訴える」の5場面を選択し、その状況を示すために「私が不機嫌に怒ると」と記載した。母が子の負情動を否定したということを明

確にするために「その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった(だろう)」とした。これら5項目を負情動否定経験の認識を尋ねる項目とした。

生体防御反応としての身体感覚を否定された場面として「いやなにおい」「変な味」「気分が悪い」「おなか痛い」「ねむい」「暑い」「熱っぽい」「足が痛い」の8場面を選択した。母が子の生体防御反応を否定したということを明確に示すために「私が『いやなにおいだ』と感じていて、母はそう感じていない時、私が『いやなにおいだ』と言うと、きっと母は『そんなことはない。いやなにおいなんかしないでしょ』と言った(だろう)」という文言にした。「言った(だろう)」という表現にすることで、事実としての記憶の正確さではなく、現在の親認識から想定される関係性により回答してもらうことを意図した。これら8項目を身体感覚否定経験の認識を問う項目とした。

質問紙は、以上の負情動否定経験と身体感覚否定経験の2因子構造を想定して作成した。質問紙には、「以下の質問項目について、あなた自身が子どもの頃の母親(もしくはそれに代わる人)の対応として、あてはまると思う程度1つに、○をつけてください。」という教示を示し、「非常にそう思う」「そう思う」「少しそう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の5件法(1~5)で回答を求めた。

4. 調査実施方法

調査は下記の2回実施した。

第1回調査：A大学の大学生及び大学院生506名。有効回答数474名(男性192名、女性281名、不明1名)。2011年5月25日~6月6日に個別自記入形式で実施。

第2回調査：関東圏内の大学生および大学院生951名。有効回答数は925名(男性460名、女性465名)。2011年10月8日~11月7日に個別自記入形式で実施。

調査は、別稿(猪飼・大河原²⁾, 福泉・大河原¹⁾)の質問紙調査と同時に行った。第1回調査および第2回調査ともに類似の結果がえられた。本論には、第2回調査の結果を記述する。

5. 結果と考察

5.1 基礎統計量と項目ごとの分布(表1・図3)

負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の平均値と標準偏差および、天井効果とフロア効果の値を表1に示した。また、各項目得点の分布を図3に示した。

表1 負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の基礎統計量

	平均値	標準偏差	天井効果	フロア効果
1. 私が不機嫌に怒ると、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった(だろう)。	2.009	0.981	2.99	1.027
2. 私が不機嫌に泣くと、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった(だろう)。	1.882	0.919	2.801	0.963
3. 私が不機嫌にぐずぐずすると、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった(だろう)。	2.083	1.029	3.112	1.054
4. 私が不機嫌にイライラすると、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった(だろう)。	2.133	1.060	3.193	1.073
5. 私が不機嫌に不安を訴えると、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった(だろう)。	1.829	0.919	2.749	0.910
6. 私が「いやなおいだ」と感じていて、母はそう感じていない時、私が「いやなおいだ」と言うと、きっと母は「そんなことはない。いやなおいなんかしないでしょ」と言った(だろう)。	2.068	1.031	3.099	1.037
7. 私が「変な味だ」と感じていて、母はそう感じていない時、私が「変な味だからいやだ」と言うと、きっと母は「そんなことはない。変な味なんかしないでしょ」と言った(だろう)。	2.067	1.028	3.095	1.039
8. 私が「気分が悪い」と感じていて、母は私(あなた)の気分が悪いとは感じていない時、私が「気分が悪い」と言うと、きっと母は「そんなことはない。気分なんて悪くないでしょ」と言った(だろう)。	1.621	0.849	2.469	0.772
9. 私が「おなかが痛い」と感じていて、母は私(あなた)のおなかが痛いとは感じていない時、私が「おなかが痛い」と言うと、きっと母は「そんなことはない。おなかなんて痛くないでしょ」と言った(だろう)。	1.547	0.834	2.381	0.713
10. 私が「ねむい」と感じていて、母はそう感じていない時、私が「ねむくていやだ」と言うと、きっと母は「そんなことはない。ねむくなんかないでしょ」と言った(だろう)。	1.608	0.831	2.439	0.776
11. 私が「暑い」と感じていて、母はそう感じていない時、私が「暑くていやだ」と言うと、きっと母は「そんなことはない。暑くなんかないでしょ」と言った(だろう)。	1.738	0.879	2.618	0.859
12. 私が「熱っぽい」と感じていて、体温計は平熱を示しているとき、私が「熱っぽくて具合が悪い」と言うと「そんなことはない。熱なんかないでしょ」と言った(だろう)。	1.831	1.035	2.866	0.796
13. 私が「足が痛い」と感じていて、見たところ何も異常がないように見えるとき、私が「足が痛い」と言うと「そんなことはない。足なんか痛くないでしょ」と言った(だろう)。	1.617	0.872	2.489	0.745

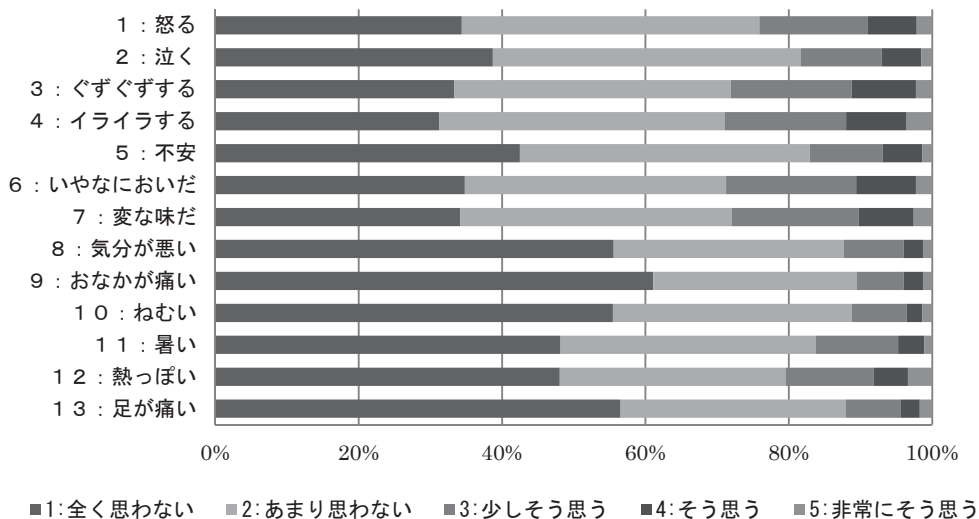


図3 各項目得点の分布

各項目において「3. 少しそう思う」「4. そう思う」「5. 非常にそう思う」を選択した人の割合は、項目1 (怒る) が24%, 項目2 (泣く) が18%, 項目3 (ぐずぐず) が28%, 項目4 (イライラ) が29%, 項目5 (不安) が17%, 項目6 (いやなおい) が29%, 項目7 (変な味) が28%, 項目8 (気分が悪い) が12%, 項目9 (お腹が痛い) が10%, 項目10 (ねむい) が11%, 項目11 (暑い) が16%, 項目12 (熱っぽい) が20%, 項目13 (足が痛い) が12%であった。項目2と項目5, 項目8～13ではフロア効果が示された(表1)。

本質問紙は、心理的な問題を抱えるに至る要因を測定する項目で作成しているため、偏りは最初から前提とされているものであり、想定とおりの結果であるといえる。

5. 2 因子分析 (表2)

因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行ったところ、3因子が抽出された。当初想定していた負情動に関する項目1～5と、身体感覚の味とにおいについて尋ねた項目6と項目7, そしてその他の身体感覚の項目8～13の3因子である。しかし、身体感覚に関する因子の因子間相関が.594と高かったことから、想定していた2因子指定で再び因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行い、最終的に2因子構造を採用した。第1因子を身体感覚否定経験、第2因子を負情動否定経験と命名した。各項目の因子負荷量、因子の α 係数の値を、表2に示した。 α 係数は第1因子が.894, 第2因子が.944で、因子間相関は.594であった。各項目が削除された場合のCronbachの α 係数を確認したところ、その値は第1因子では.872から.889であり、8項目全体の α 係数.893の方が、値が大きかった。第2因子では.926から.942であり、5項目全体の α 係数.944の方が、値が大きかった。よって、項目を削除する必要はないことが確認された。以上より、負情動・身体感覚否定経験認識質問紙は、十分な信頼性と妥当性が得られたといえる。

表2 負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の因子負荷量と α 係数

項目	I	II
項目9:「おなかが痛い」	0.878	-0.085
項目8:「気分が悪い」	0.820	0.028
項目13:「足が痛い」	0.770	0.010
項目10:「ねむい」	0.765	-0.055
項目11:「暑い」	0.707	-0.038
項目12:「熱っぽい」	0.643	0.096
項目7:「変な味だ」	0.511	0.202
項目6:「いやなおいだ」	0.460	0.217
項目1:怒る	-0.054	0.925
項目3:ぐずぐずする	0.007	0.902
項目4:イライラする	-0.012	0.902
項目2:泣く	-0.008	0.891
項目5:不安	0.130	0.737
α 係数	.894	.944
因子間相関	.594	
累積寄与率	62.915%	

5. 3 性別による差の検討 (表3)

2つの下位尺度はともに正規性が認められなかったため、Mann-WhitneyのU検定を行い、男女の中央値の差を検定した。負情動否定経験因子には性差は認められなかったが(U=103198.000, n. s.) 身体感覚否定経験因子では、男性の方が、中央値が有意に高いということが示された(U=94864.500, p<.01)。身体の不調などに関して弱音をかくことは男らしくないというジェンダーバイアスが、子育てに反映されている可能性が示唆される結果であった。

表3 性別による負情動否定経験認識と身体感覚否定経験認識の中央値の差の検定

	性別	N	中央値	SD	平均ランク	U値
負情動否定経験	男性	460	2.000	.891	471.16	103198.000
	女性	465	2.000	.889	454.93	
身体感覚否定経験	男性	460	1.750	.709	489.27	94864.500**
	女性	465	1.500	.686	437.01	

** : p<.01

6. まとめ

本研究においては、「感情制御の発達不全」の症状形成に関する仮説モデルを心理学的に実証する準備として、母からの負情動否定経験・身体感覚否定経験認識質問紙の作成を行った。想定したとおり、2因子構造であること、および信頼性の確認を行うことができた。また、身体感覚否定経験については、性差があり、男性のほうが身体感覚を否定される傾向が強いことが示された。

本質問紙を用いた研究は、別稿に記載した。猪飼・大河原²⁾では、本質問紙と解離傾向と自傷行為について、福泉・大河原¹⁾では、家庭内暴力傾向について検証した。

付記：調査にご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 福泉敦子・大河原美以：母からの負情動・身体感覚否定経験が攻撃性に及ぼす影響－家庭内暴力傾向との関係－. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第64集, 179-188, 2013.
- 2) 猪飼さやか・大河原美以：母からの負情動・身体感覚否定経験が自傷行為に及ぼす影響－解離性体験尺度DES IIとの関係－. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第64集, 171-178, 2013.
- 3) 大河原美以：小学校における「きれる子」への理解と援助－教師のための心理教育という観点から－. 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第26集, 141-151, 2002.
- 4) 大河原美以：小学校における「きれる子」への理解と援助(2)－22例の分析からみた「問題のなりたち」－. 東京学芸大学紀要 第1部門教育科学, 第54集, 103-110, 2003.
- 5) 大河原美以：小学校における「きれる子」への理解と援助(3)－解離状態の子どもへの治療援助技法－. 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第27集, 11-25, 2003.
- 6) 大河原美以：怒りをコントロールできない子の理解と援助：教師と親の関わり, 金子書房, 2004.
- 7) 大河原美以：親子のコミュニケーション不全が子どもの感情の発達に与える影響－「よい子がきれる」現象に関する試論－, カウンセリング研究, 37, 180-190, 2004.
- 8) 大河原美以：子どもの心理治療にEMDRを利用することの意味－感情制御の発達不全と親子のコミュニケーション－, こころの臨床アラカルト, 27(2), 293-298, 星和書店, 2008.
- 9) 大河原美以：子どもの「感情制御の発達不全」と治療援助の方法論, 平成21年度東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士学位論文, 2010.
- 10) 大河原美以：教育臨床の課題と脳科学研究の接点(1)－「感情制御の発達不全」の治療援助モデルの妥当性－. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第61集, 121-135, 2010.
- 11) 大河原美以：教育臨床の課題と脳科学研究の接点(2)－感情制御の発達と母子の愛着システム不全－. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第62集, 215-229, 2011.
- 12) 鈴木廣子・大河原美以・殿川佳子・藤岡育恵・響江吏子：母子の愛着システム不全評価尺度の作成(1)－2歳児における質的データの分析－. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第62集, 241-255, 2011.

母からの負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の作成

—— 因子妥当性と信頼性の検証 ——

Development of Invalidated Negative Emotion and Somatic Sensation Questionnaire

—— Investigation of Factorial Validity and Reliability ——

大河原 美以*・猪飼 さやか**・福泉 敦子***

Mii OKAWARA, Sayaka IKAI, Atsuko FUKUIZUMI

教育心理学分野

Abstract

The purpose of this paper is to develop Invalidated Negative Emotion and Somatic Sensation Questionnaire and to investigate its factorial validity and reliability. This is preparation for getting psychological evidence about the validity of the therapeutic process model of “under developed emotional regulation” which was constructed on the bases of clinical practice and theoretical validity. Invalidated Negative Emotion and Somatic Sensation Questionnaire had 2 factors. This Questionnaire estimate the invalidation of negative emotion and somatic sensation by mother. Negative emotional factor included 5 items about “angry” “crying” “fretful” “irritated” “uneasy”. Somatic sensation factor included 8 items about “repulsive smell” “strange taste” “feel sick” “pain in one’s insides” “sleepy” “hot” “feverish” “leg hurts”. 474 university students(first time) and 926 university students(second times) completed the questionnaire. The results suggested this Questionnaire had sufficient reliability and validity.

Key words: negative emotion, somatic sensation, factorial validity, reliability, parent-child relationship, Invalidating environment

Department of Educational psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 臨床実践と理論的妥当性に基づいて構成された「感情制御の発達不全」の治療援助モデルを心理学的に実証するための準備として、母からの負情動・身体感覚否定経験認識質問紙を作成し、その因子妥当性と信頼性の確認をおこなった。質問紙は2因子で構成された。負情動否定経験因子は「怒る」「泣く」「ぐずぐずする」「イライラする」「不安を訴える」という5場面に関する5項目、身体感覚否定経験因子は「いやなおい」「変な味」「気分が悪い」「おなかが痛い」「ねむい」「暑い」「熱っぽい」「足が痛い」の8場面に関する8項目で構成された。調査は2回（1回：474名、2回目：926名）実施し、想定どおりの2因子構造が確認され、信頼性も十分であることが示された。

キーワード: 負情動, 身体感覚, 因子妥当性, 信頼性, 不認証環境

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

** Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

*** Adachi City Child & Family Support Center (1-5-17 Higashi-Ayase, Adachi-ku, Tokyo, 120-0004, Japan)